

オペラ界の アイドルたち

オペラとディーヴァ崇拜は切っても切れない関係にある。何世紀にもわたって、類まれな声と強烈な個性を備えたごく少数の歌手によって、オペラのあらゆる情熱やドラマが具現化されてきた。そして、オペラファンはいつもそうした歌手たちに興奮し、称賛し、熱狂してきた。舞台の上でも、舞台以外でも、オペラ界のアイドルたちは緊張に満ちたドラマへの愛とともに、オペラという芸術形式全体を活性化してきたのだ。

伝 説的なオペラ・スターといえば、ほとんどがディーヴァ（イタリア語で女神）と呼ばれるソプラノ歌手だが、テノール歌手、オペラ創成期にはカストラートだったこともある。誰もがオペラの神秘的な魅力を人々の記憶に長く留めるうえで中心的な役割を果たしてきた。そこにはどんな秘密があるのだろうか？

並外れた高音はほぼ必須の条件で、ソプラノやテノールが美しく長く持続させて歌うハイCは、聴衆に衝撃的な感動を与える。トップに君臨するオペラ歌手たちは役者でもあり、説得力ある歌唱によって役に命を与える。しかし、同じくらい重要なのは、華やかで気まぐれな個性だ。多くのディーヴァが最高のオペラ作曲家や指揮者のミューズになることに不思議はない。

とはいえ、ディーヴァ中毒が蔓延するのはオペラ愛好家のあいだでのこと。彼らはお気に入りの歌手を追って世界中に出かけ、カーテンコールでは花束を投げ、恋人やペット、髪型や何を食べているかなど、私生活の些細な情報も集めている。トップに君臨するディーヴァ・アッソールタ（絶対的ディーヴァ）ともなると、さらなる異名をも持つ。20世紀のギリシア系アメリカ人ソプラノ歌手マリア・カラスは「ラ・ディヴィーナ」（神聖なるもの）、ライバルのレナータ・テバルディは「ラ・レジーナ」（女王）と呼ばれた。

トップ歌手たちは気分屋だし要求も厳しい。気まぐれやナルシスティックで有名なこともある。だが、それが許される存在なのだ。その存在だけでオペラのチケットは完売するのだから。ひどく重い衣装や、頭がムズムズするカツラ、不格好な舞台装置、奇妙な特殊効果とともに、こうした歌手たちは重い商業的責任を担っている。ヴェネツィアでのオペラハウスの創世期以来、彼らは法外な出演料を要求してきた。今でも、公演の最初の休憩時間に楽屋で現金払いのギャラを受け取ることも多い。 >>

◀ **マリア・カラス** 1973年11月、ロンドンのロイヤル・フェスティヴァル・ホールでイギリスのファンから最後の称賛を受ける。イタリアのテノール、ジュゼッペ・ディ・ステファノを伴い、1年かけて行われたさよならツアーの一環だった。4年後、カラスはパリで死去した。

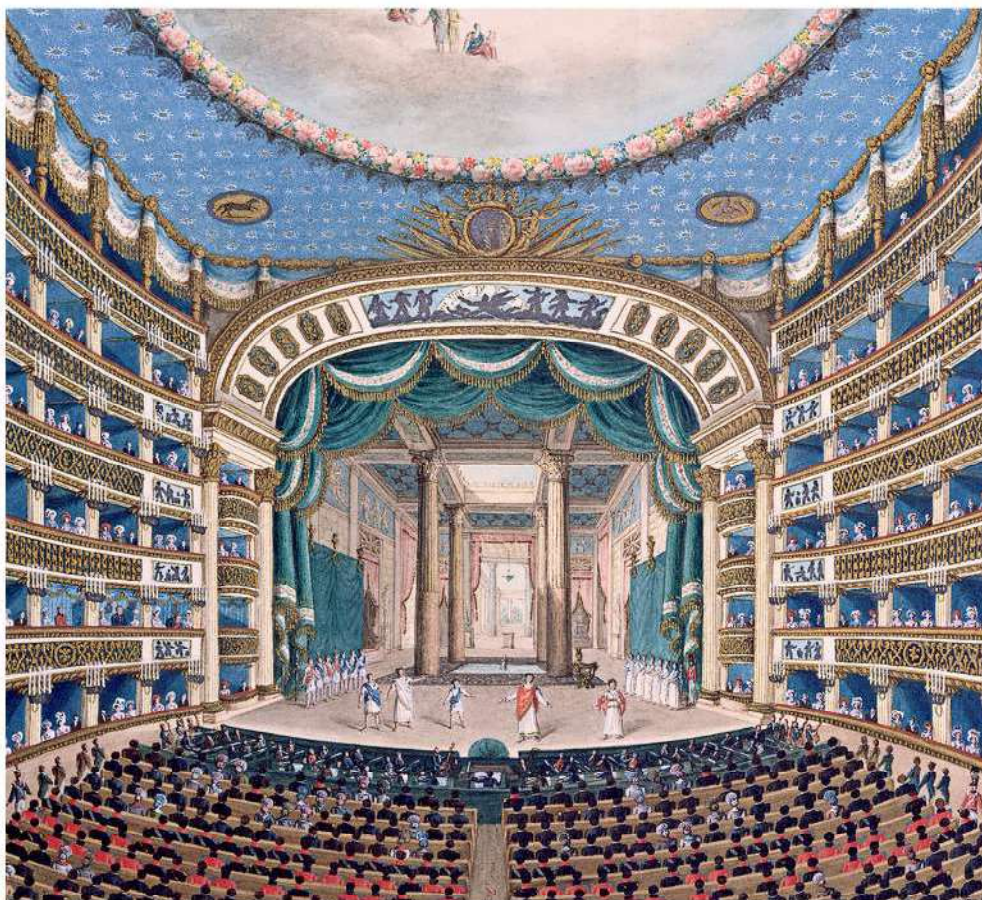




村人たちが結婚式の準備 フィガロとスザンナ、バルトロとマルチェリーナの2組の結婚式が行われる。エイドリアン・ノーブル演出による『フィガロの結婚』より。2007年、フランスのリヨン国立歌劇場。

イタリア・オペラ (1800年頃～1925年)

Italian opera



オペラという芸術形式の誕生以来その中心的存在だったイタリアの音楽家が、19世紀になるとふたたび卓越した独創性を発揮してオペラ界を牽引した。このころには、ドイツやフランス、ロシア、チェコのオペラ界もイタリアの対抗勢力となっていたが、それでもイタリア・オペラがまだ揺るぎない地位を保ったのは、5人の才能ある作曲家のおかげである。ロッシーニ、ペッリーニ、ドニゼッティ、ヴェルディ、プッチーニの5人は矢継ぎ早に作品を発表し、世界中に旋風を巻き起こした。

「イタリア・オペラ」は、今日ではこれら5人の大作曲家と少数の19世紀の作曲家に対して使われる言葉になっているが、創造力の高まりが時代や環境と何の関わりもなく起こったわけではない。18世紀半ば以降、イタリアの代表的な作曲家は北ヨーロッパで活躍ようになるが、彼らはグルックやモーツァルトなど、イタリア以外の作曲家の影響を受ける。とりわけ、「オペラ・セリア」(正歌劇)と「オペラ・ブッファ」(喜歌劇)の境界を取り払い、どこにでもいる「生身の」人物を舞台上に登場させたモーツァルトの影響は大きかった。

モーツァルトの影響

バイエルン生まれで、モーツァルトやハイデンを崇拜していたヨハン・ジモン・マイルは、ガエターノ・ドニゼッティを教えたという点でのみ名前が挙がることが多いが、絶頂期にはイタリアで最も影響力を持った作曲家であり、モーツァルトからジョアキーノ・ロッシーニに至る音楽の橋渡しを務めた人物だ。ロッシーニは敬愛を込めてマイルを「パパ・マイル」と呼んだが、ロッシーニがいたために、マイルの存在が甘んじてしまうことにもなった。わずか21歳でヴェネツィアのオペラ界に躍り出たロッシーニ。その代表作として誰もが思い浮かべるのが、コミック・オペラ《セビーリヤの理髪師》と《チエネレントラ》である。彼の作品はとりわけ歌唱部分の評判が高く、そのスタイルは「バルカント」(美しい歌唱)と呼ばれるようになる。さらにもう一つ卓越した才能があった。1815年にナポレオンが敗れ、イタリアに昔ながらの王国や公国が復活して圧政がよみがえった混乱の時代に政治に巻き込まれず、身を処す才能だ。

検閲官による監視

オペラの世界では、新しい台本を上演するにはすべて許可が必要だった。君主制やローマ・カトリック教会、外国の占領に対して少しでも批判的な内容が含まれていないか、当局は神経をとがらせていたので

▲19世紀初めにフランス人画家が描く ナポリのサン・カルロ劇場の舞台と客席。イタリアで最も格調高いオペラハウスと言われている。

ある。1827年に初演されたオペラ《海賊》で、ロッシーニのバルカントの後継者とされたヴィンチェンツォ・ペッリーニは、政治や宗教の主題を巧みに避けることで、この問題に対処した。ペッリーニは生涯に10のオペラ作品を書き上げるが、1835年、33歳の若さで世を去った。

ペッリーニが死去し、ロッシーニもパリでオペラ作曲家からの引退を表明、その後のオペラ界で絶賛されたのが、当代随一のイタリアの作曲家ガエターノ・ドニゼッティである。代表作には《愛の妙薬》や《ランメルモールのルチア》などがある。ドニゼッティは検閲に悩みながらも、《アンナ・ボレーナ》や《ロベルト・デヴリュー》のように、歴史オペラの舞台を新教国イングランドに設定することでトラブルに巻き込まれまいとした。しかし《マリア・スタウアルダ》は、悲劇的ヒロインのスコットランド女王メリアがカトリックだという理由で、1834年にナポリ王によって上演を禁じられる。検閲官との論争に疲れたドニゼッティは、ロッシーニの後を追ってパリに移り住むことを決意する。

1830年代には、イタリアで最も繁栄している都市ミラノのスカラ座が、イタリア最高のオペラの殿堂になっていた。ペッリーニやドニゼッティが、スカラ座でまず成功を取って初めて世界に知られたのと同じ道を、ジュゼッペ・ヴェルディもたどることになる。デビュー作《オベルト》と最後のオペラ《ファルスタッフ》はどちらも、スカラ座で初演された。

巨匠ヴェルディ

イタリアの作曲家の中で、ヴェルディの人気は抜きん出ている。早い時期にバルカントから脱皮し、オペラを音楽劇というまったく新しい軌道に乗せた。先運と同様ヴェルディにも、心に残るメロディーを生み出す天賦の才能があったが、同時に、愛、名譽、権力、欲望、裏切り、死といった普遍的な主題を体現する魅力的な登場人物を創造するという希有な能力にも恵まれていた。哀切な《椿姫》から壮大な《ドン・カルロス》まで、彼のオペラのほぼすべて(2作品を除く)が悲劇であるのも意外ではない。ヴェルディは民族独立運動のシンボルとなった。1842年初演の《ナブッコ》はユダヤ人のバビロン捕囚がテーマで、オーストリアの支配にあえぐイタリア人の苦境と重なり、人々の心を揺さぶったのだ。さらに《レニャーノの戦い》には、リソルジメント(イタリア統一運動)に対するヴェルディの思いが《ナブッコ》以上に強く表れている。1861年にイタリア王国の成立が宣言されると、ヴェルディは短期間だが国会議員を務めた。1890年代には、ピエトロ・マスカーニやルッジェロ・レオンカヴァッロによって、「ヴェルジズモ」という日常生活に近いスタイルがオペラに取り入れられるが、ヴェルディの後継者といえやばりジャコモ・プッチーニということになるだろう。

ニーベルングの指環 *Der Ring des Nibelungen*

リヒャルト・ヴァーグナーの楽劇4部作《ニーベルングの指環》は、《ラインの黄金》《ヴァルキューレ》《ジークフリート》《神々の黄昏》からなる長大な作品で、4夜連続での上演を想定して作られた。《指環》《リング》などとも呼ばれている。全曲が完成するのに実に20年以上の歳月がかかっている。通して上演すると15時間以上かかり、作品としてオペラ史上最高峰の偉業とされる。1876年にパイロイト祝祭劇場で初演され、その後も世界中で上演されている。

着想からオペラの完成まで

着想のきっかけは1848年のフランス二月革命だった。フランスでの動乱後、ヴァーグナーは既存の体制の崩壊を描く「革命劇」の構想を練り始めた。また、同時代のロマン派の思想家や芸術家に人気のあった古典文学にも熱中していた。ヴァーグナーの神秘的・政治的ヴィジョンと豊かな想像力は、北方の伝説によって刺激を受けた。たとえば『エッダ』で語られる北欧神話、また『ヴォルスガ・サガ』などの伝説、グリム兄弟が収集・出版したドイツ民話や神話、中世ドイツ叙事詩の代表作『ニーベルングの歌』などである。すでに1848年には『ジークフリートの死』として、自身の新たな情熱を表現する

英雄的なオペラの草案が書かれた。ヴァーグナーはこのヒーローに魅了され、ジークフリートの物語を、それ自体が宇宙を成すようないくつものテーマや筋書きの複雑な絡み合いの中に織り込んだ。そしてその世界の創造に取りかかる。ドイツ的英雄や神々を選んで住ませるが、彼らは最終的には革命の炎に飲み込まれる運命だ。1853年に試作の作曲を始め、すべてが完成したのは1874年だった。バイエルン王国のルートヴィヒ2世がヴァーグナーのパトロンとして経済的また政治的支援をし、1876年に初演が実現。ヴァーグナー自身も資金集めに力を入れたが、第1回パイロイト音楽祭は大赤字となった。

《ニーベルングの指環》におけるライトモチーフ

《指環》は独自の音楽的、また劇的な世界を形作っている。多くの革新的手法の中でも、「ライトモチーフ」と呼ばれる短い主題（動機）が200ほども用いられた。モチーフを特定の人物や物、考えと結びつけ、またオペラの展開につれて進化させる。たとえばノートゥングと呼ばれる剣のモチーフは鋭くきらめく武器の形をなぞるようであり、またフンディングという人物のモチーフは、彼の性格やサイクルでの立場を表すように低く響く。具体的な物でない対象に使われることもあり、たとえば指環にかけられた「呪い」のモチーフはさりげなく重要な場面で過去または未来をほのめかすように配され、最高の効果を与える。モチーフは現れ、変化し、広がり、織り交ぜられて、幾重もの示唆に富む音楽のテクスチャを作っている。

《ニーベルングの指環》の登場人物

神話的な壮大さを持つ物語だが、ソリストは意外に少数で、いくつかのグループに分けられる。ストーリーは愛に対する権力と欲の戦いであり、究極的には愛があらゆる力に打ち勝つことが示される。主要な役にはヴォータン、ブリュンヒルデ、ジークフリート、ニーベルング族のアルベリヒなどがいる。

ラインの乙女たち ライン川の誘惑的なニンフ。ヴォークリンデ、ヴェルグンデ、フロースヒルデ

ニーベルング族 地下の王国ニーベルハイムの小人族。アルベリヒ、ミーメ、ハーゲン

巨人族 神々の居城であるヴァルハラを建設する。ファソルト、ファフナー（《ジークフリート》ではファフナーは大蛇の姿で登場）

神々 ヴァルハラに住む。最後は滅びる運命。ヴォータン（《ジークフリート》ではさすらいの人に身をやつしている）、フリッカ、ローグ、フライア、ドンナー、フロー、エルダ

ヴェルズング族 ヴェルゼ（ヴォータンの別名）と人間との子孫。ジークムント、ジークリンデ、ジークフリート

ヴァルキューレ 死者を運ぶ乙女、ヴォータンの娘。ブリュンヒルデ、ゲルヒルデ、オルトリンデ、ヴァルトラウテ、シュヴェルトライテ、ヘルムヴィーゲ、ジークルーネ、グリムゲルデ、ロスヴァイセ

ノルン エルダの娘たち、黄金の糸で運命を編む。第1のノルン、第2のノルン、第3のノルン

ギービヒ家 ライン川のほとりの宮殿に住む王族。グンター、グートルーネ

その他 フンディング、森の小鳥



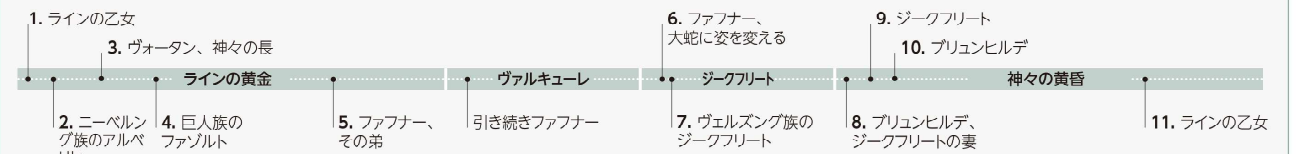
◀ジークフリートが大蛇のファフナーを退治 ルートヴィヒ2世によって建築された有名なノイシュヴァンシュタイン城(ドイツ)内の壁画。



▶「ジークフリートの死」ゲルマン英雄伝中のテーマの一つで、数多くの芸術作品を生んだ。《ニーベルングの指環》の出発点でもある。

魔法の指環の所有者

ニーベルング族のアルベリヒは愛を捨て、ラインの乙女から黄金を奪い、魔法の指環を得る。もともとは盗んだものだが「ニーベルング族の指環」と呼ばれるようになったこの指環は、その持ち主に限りなく富と権力を与える。だがオペラの冒頭でアルベリヒは指環に呪いをかけた。自分以外の者が指環の魔力を知りながらそれに触れれば、必ず滅びるといふ呪いだ。連作オペラの最終章ではブリュンヒルデが自ら犠牲になって呪いを解き、指環は元の場所であるライン川の水底に戻り、魅惑的なラインの乙女たちに守られることになる。



ジャック・オッフエンバック

Jacques Offenbach

1819年6月20日(ケルン、ドイツ)～1880年10月5日(パリ、フランス)

オッフエンバックは、ケルンのシナゴークの教会音楽家の息子として生まれ、のちフランス・オペレッタの巨匠となった。彼のオペレッタは「オペラ・ブフ」とも呼ばれ、オペラ・コミックの流れを汲む。笑劇的なプロットとウィットに富んだ音楽で、19世紀半ばのパリの花形となった。最大の成功作は《美しきエレヌ》だが、オペラの最高傑作は死の翌年に初演された《ホフマン物語》とされている。



オッフエンバックがパリに移り住んだのはわずか13歳の時だった。まず音楽を勉強し、次にチェロ奏者としてオーケストラに入り、そして作曲を開始した。モーツァルトやシューベルトに影響を受けたが、直感と生計上の必要によりヴォードヴィルやサロン向けの作品を書くようになった。より多くの観客を得るためにブフ・パリジャン座を創設し、1幕もののオペレッタを30作品上演したのち、1858年に《地獄のオルフェ》で成功を取めた。その後10年間で、《美しきエレヌ》や《パリの生活》など万人受けする人気作のおかげで、彼の名声はロンドンやウィーンなどヨーロッパ全土に広がった。さきわめて多作であり、600曲以上の作品を書いたが、そのうち130曲は劇場作品だった。

普仏戦争(1870～1871年)は、オッフエンバックの人生を狂わせた。カトリックに改宗し、フランスのレジオン・ドヌール勲章を受け、機知と寛大さで知

◀ **ジャーヌ・ロード** とりわけ愛されているオペレッタ《美しきエレヌ》でタイトルロールを演じた。1916年、フランスのブフ・パリジャン座での上演。

代表的なオペラ作品と初演年

- 1858年 《地獄のオルフェ》
- 1864年 《美しきエレヌ》
- 1866年 《青ひげ》
- 1867年 《ジェロルスタン女大公殿下》
- 1868年 《ラ・ペリコール》
- 1881年 《ホフマン物語》

られていたが、突然コダヤ系ドイツ人として中傷されることになった。一時はパリを離れたものの、歓迎されないその街にふたたび戻ってきた。1873年にはリリック座の支配人に就任したが、すぐに倒産してしまう。自身の状況もしだいに絶望的なものになっていった。1876年、資金集めのためにアメリカ合衆国で演奏旅行を続けたが、健康状態は悪化していた。未完の遺作となった《ホフマン物語》は、友人たちの手で上演の運びとなったが、晩年の悲観的な状況が反映された作品である。

「オペラ・コミックとは
まさに歌のあるヴォードヴィルなのだ」

ジャック・オッフエンバック

地獄のオルフェ Orphée aux enfers

全4幕のオペラ・ブフ。1時間45分(改訂版2時間45分)・作曲:1858年(改訂:1874年)・初演:1858年10月21日、ブフ・パリジャン座(パリ、フランス)
・台本:エクトル・クレミュールとリュドヴィク・アレヴィ【仏語】

日本では《天国と地獄》というタイトルで知られている《地獄のオルフェ》は、オッフエンバックの最初の成功作で、パリで夜遅くまでオペレッタを楽しむという流行を生んだ作品である。古代神話とバロック・オペラの愉快的なパロディであり、17～18世紀のオペラファンに愛されたオルフェウス伝説を滑稽な物語にしている。耳に残る印象的な曲と不条理な設定は、当時の遊び心をくすぐり、最後は「天国と地獄」として知られている有名なカンカンで締めくくられる。

第1幕

ウリディスは、夫のオルフェに愛想をつけている。彼の笛の演奏にももはや喜ばない。腹が立ったオルフェは、ヴァイオリン協奏曲を無理やり聴かせる。羊飼いのアリスティに扮したプリュトンは、ウリディスの心をつかみ、冥界へと導く。彼女はオルフェに自分の死を告げるメモを残す。「世論」に押され、やむをえずオルフェは彼女の後を追う。

第2幕

オリュンポス山では、プリュトンがウリディスを連れ去ったことをジュピテルが不快に思っている。ほかの神々はプリュトンを擁護し、ジュピテルの暴君ぶりと醜さをあざ笑う。「世論」に連れられ、オルフェが妻を探しにやってくる。ジュピテルが冥界にウリディスを探しに行くことを提案する。神々は皆、ジュピテルについていく。

第3幕

ウリディスが冥界の牢屋に捕らわれているところへ、ジュピテルが求愛にやってくる。キューピドンにハエに変身させてもらったジュピテルは、鍵のかかった牢屋に入り込み、ウリディスを誘惑する(ハエの二重唱)。ウリディスを口説き落とせると確信したジュピテルは、正体を明かす。

第4幕

ジュピテルはウリディスを陽気なバックスの巫女に変身させる。彼女が歌で一同を楽しませた後、皆でカンカンを踊る(この舞踏会は奇抜だ)。プリュトンとジュピテルがウリディスを取り合うなか、オルフェが到着する。オルフェは、一度も振り返らずに連れ出すなら、ウリディスを取り戻せると言われる。しかし、ジュピテルは雷を落としてオルフェを驚かせ、振り返らせる。これでウリディスはバックスの巫女のままとなり、神々は祝う。



おもな登場人物

オルフェ(オルフェウス)(テノール) 音楽家
ウリディス(エウリュディケー)(ソプラノ)
オルフェの妻
ジュピテル(パルトン) 神々の王
アリスティ/プリュトン(プルートル)(テノール)
冥界の神
ジョン・ステュクス(テノール) 冥界の牢番
メルキュール、マルス(テノール) 神々

《地獄のオルフェ》の人気は高く、皇帝ナポレオン3世とウジェニー皇后のためにガラ公演が組まれたほどだった。これは大衆向けのオペレッタの作曲家にとって大きな名譽となった。

◀ **ジュリエット・メアリ** 1902年、パリのヴァリエテ劇場で印象的なウリディスを演じた。

フィリップ・グラス Philip Glass

1937年1月31日(ボルチモア、メリーランド州、アメリカ合衆国)~

フィリップ・グラスは、20世紀後半に活躍したアメリカ人のミニマル・ミュージック作曲家の中で、最も名高いオペラ作曲家である。舞台演出家のロバート・ウィルソンと共同制作した《浜辺のアインシュタイン》は、1976年の初演でオペラの新概念を新たな高みへと導いた。



グラスはニューヨークのジュリアード音楽院で修士号を取得後、パリでナディア・ブーランジェに学んだ。一方でグラスは、シターの名手ラヴィ・シャンカルや数回にわたるインドへの旅からも影響を受けた。1960年代にはニューヨークで電子楽器を

使って西洋音楽とインド音楽の概念をミックスさせることを試みた。グラスのミニマリスト・スタイルの特徴の一つは、あたかもトランス状態のような、一定の音符やコードの意図的な反復である。グラスは舞台向けに20以上の主要な作品を手がけた。代

表作として、《浜辺のアインシュタイン》に始まり《サティアグラハ》《アクナーテン》と続く『ポートレート3部作』のオペラ、《シビル・ウォーズ(市民戦争)》《ザ・ジュニパー・ツリー》《アッシャー家の崩壊》《航海》が挙げられる。



ロバート・ウィルソン

1941年に生まれたロバート・ウィルソンは、ニューヨークブルックリンのプラット・インスティテュートに通い、パリでジョージ・マクニールに絵画を学んだ。マース・カニンガムとマーサ・グラハムによる振付に影響を受けたウィルソンは、舞台上の動きに視覚的なアイデアを添えた。グラスと伝説的な共同作品を生み出す一方で、スーザン・ソントグやウィリアム・S・パロウズ、ルー・リード、デヴィッド・バーン、ローリー・アンダーソン、ジェシー・ノーマンをはじめ、多くの著名人と共同作業をこなし、彼らにもインスピレーションを与えた。



◀ロバート・ウィルソン(左) フィリップ・グラスと共に、《浜辺のアインシュタイン》でオペラへの新たなアプローチを確立させた。ウィルソンは以降、世界中でオペラの演出を手がけてきた。

◀リハーサル 1993年にニューヨークでフィリップ・グラス・アンサンブルとリハーサルをするグラス。グラスは、エロール・モリス監督の『シン・ブルー・ライン』(1988年)など映画音楽も作曲している。

浜辺のアインシュタイン Einstein on the Beach

全4幕と5つの「ニー・プレイ」から成るオペラ、4時間30分・作曲：1974~1975年・初演：1976年7月25日、アヴィニオン歌劇場(アヴィニオン、フランス)
・台本：フィリップ・グラス、ロバート・ウィルソン、クリストファー・ノウルズ、サミュエル・M・ジョンソン、ルシнда・チャイルズ[英語]

《浜辺のアインシュタイン》は、広く影響をおよぼした前衛的なオペラである。電子的に高速で繰り返される音楽のパッセージは、まるで催眠や幻覚を引き起こすような効果を持つ。オペラの非直線的な展開は、作品の雰囲気や、残響する視覚的イメージ、音楽的モチーフに意識を向けさせる。ヴァイオリニストに転生したアインシュタインは、アインシュタインの扮装で舞台上上がり、作品のロジックをゆるやかに仕切っている。彼の相対性理論は、コンセプチュアルな驚きの源泉として機能しており、それは視覚的であると同時に音楽的で、究極の演劇的表現ともいえる。

《浜辺のアインシュタイン》は、物語仕立てではないという点で特異なオペラである。構成要素となるのは、物語の筋書きではなく、視覚的イメージ、音楽、言葉の反復である。この作品は無数のアイデアを探求しており、アインシュタインの一般相対性理論、その理論のメタファーとしての列車の動き、そして偏見と審判の概念への扉となる裁判所でのやり取りなどが含まれる。これらはストーリーとしてではなく、歌詞の羅列で表現される。

作品の非定型的な構造は、パフォーマンスによっても強調され、休憩をはさまないこの長時間のオペラでは、観客が「ストーリー」の重要な瞬間を逃すことなく劇場を自由に出入りできる。本作を構成する要素の一つに、グラスとウィルソンが「ニー・プレイ」(略して「ニー」)と呼ぶ演奏がある。ニー・プレイは、大きな舞台セット変更が必要なシーンの間に演奏される。オペラはニー・プレイ1で幕を開ける。アンサンブルが「ワン、ツー、スリー、フォー、ファイブ……」と数字を読み上げることで、網の目のように催眠効果を張り巡らせる。第1幕には列車のシーンと、「ミスター・ボーヤングルス」の歌詞を含む裁判シーンがあり、最後はニー・プレイ2で締めくくられる。第2幕ではダンスが披露され、「夜行列車」と呼ばれる変形ヴァージョンで列車のイメージに立ち返る。ニー・プレイ3の後、第3幕では「刑務所」をテーマに裁判のイメージに戻ってくる。機械的な合唱が雲のように立ち込め続けるなか、証言者がルシнда・チャイルズの散文(季節はずれの冷房が

効いたスーパーマーケットにいた)を読み上げる。2つ目のダンスの後に、ニー・プレイ4が続く。第4幕は、「建物」「ベッド」「宇宙船」のテーマを探求する。そして、オペラはバスの運転手が(ベンチの恋人たち)を歌うニー・プレイ5で幕を閉じる。

おもな登場人物

アインシュタイン(ヴァイオリニスト) 相対性理論提唱者
アンサンブル(ソプラノ、アルト、テノール)
俳優、ダンサー



ほとんどのオペラ作曲家はまず台本を出発点とする。グラスとの共同制作で、ウィルソンは描画やヴィジュアル・イメージを使ってグラスの想像力をかき立てる、という異なる起点を採用した。

▶ロバート・ウィルソン 1992年にパリ郊外の先進的なポピニー劇場MC93で、3度目となるこのオペラの演出を手がけた。